
仮面ライダーディケイド～ドラゴンボールの世界～

RYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーデイケイド～ドラゴンボールの世界～

【ZPDF】

Z0561M

【作者名】

RYO

【あらすじ】

世界を旅するディケイドが次にたどり着いた世界。

そこは7つ集めるとどんな願いも叶う球があるといつ夢のよつな世界だった？

～プロローグ 龍球の世界～（前書き）

2作目となります

前作を読んだ方ダンテズインフルノの世界じゃなくて「めんたい」と
こっちの方が書きたくなっちゃったんですね
いろいろと突っ込みどころは満載ですがどうぞ読んでください

「プロローグ 龍球の世界」

「今度は一体何の世界なんだ？」

士が呟く。

今回降りて来たスクリーンに描かれていたのは、
「ボールですかね。オレンジ色のボールが七つ。」

なつみが言う。確かに描かれているのは7つのボールだ。

そしてそれぞのボールに1つから7つまでの星型が刻まれている。

「何の世界なのかな？ ボールだから球技でもするのかな？」

ユウスケが楽しげに言う。

それに士がやれやれと言った感じで答える。

「そんなわけあるか。少しは考えて喋れ。」

「悪かったよ。でも一体何の世界なんだろ？」「ユウスケはなおも納得できないでいるようだった。

そんな二人へなつみが提案する。

「なんにせよ一度外へ出てみませんか？」

「なんだこれは？」

「おお！」

「うわ～、なんでしようあれ。」

3人の驚嘆の声。

そもそもそのはず、なつみの提案で外に出た3人は遠くに街を発見。
兎にも角にもその街へと向かうことになりいざ到着してみるとみた
こともない景色が広がっていたのだ。

「車が空を、飛んでる。」

そう、そして、

「なんだ、この建物の形。変だな。」

「おい、あいつが投げたカプセルが変形して車になつたぞ。」
要するにそういうことである。

彼らは今まで色々な世界を旅し、様々なものを見て來た。

その彼らが見たことの無い光景がこの世界には広がっていた。

「一体何なんだ、ここは。」

等と士が言つてゐると背後からの聞きなれた、しかしあまり聞きたくない声。

「やあ、士。困つてゐるみたいだね。」

さも面倒くさそうに士が振り返る。

「海東。またお前か。何の用だ。」

「その言い方は無いんじやないかな。困つてゐる君達にこの世界の事を教えてあげようと思ったのに。」

するとユウスケが身を乗り出し海東に尋ねる。

「知つてゐるの？教えてよ。」

「いいだらう。この世界は、ドラゴンボールの世界だ。」

「――ドラゴンボール？」

3人は声をそろえて言つ。

「やう。ドラゴンボールだ。7つ集めるとどんな願いも叶うと言ひ、まさに夢のようなボールさ。」

「で、お前はこの世界でそのドラゴンボールを盗もうってわけか。」

「人聞きの悪い言い方はよしてくれよ士。」

「僕が盗むんぢやない。お宝が僕に盗まれたがるんだ。」

「そうか、まあいい。大体わかった。」

「で、お前はこれからどうするんだ？」

「それはもちろんこの世界のお宝、ドラゴンボールを手に入れるよ。」

「そういうわけだ、じゃあね。」

「海東は言い終わると颯爽と去つていく。

「つたぐ。あいつらしいな。」

「よし、俺達も行くか。もう少しこのあたりを回つてみようぜ。」

「士はそう言つとさつと歩きだす。」

「待つてくださいよ、士君。」

「待てよ士。」

士の後になつみとユウスケも続く。

（1幕 悟空登場）

街の散策を初めて30分ほど経った頃だった。

ボカアアアン！

突如爆炎と共に空飛ぶ車が一台落ちてくる。

それを合図にか他の車も次々と爆煙を上げながら落ちてくる。

街は火の海になった。人々が悲鳴をあげ逃げ惑う。

「一体何事だ。」

士はそう言い車達の落ちて来た空中へと目を向ける。
そこには空中を浮遊する黒いタイツを着たような姿の大型の怪人たち。

そいつらが空飛ぶ車に群がり破壊し、撃ち落としている。

「なるほどな、あいつらか。行くぞユウスケ。」

「ああ、士。」

二人はそう言うと変身すべくそれぞれの準備をする。

士はカードをバックルに挿入。

「カメン、ライド」

独特の電子音声。

バックルを閉じる。

「ディケイド！」

音声と共に士の体が特殊なスーツに包まれ頭上にマゼンタ色のフレートが現れる。

それが頭の定位置へ収まる、と同時に体を纏うスーツにもマゼンタの色が宿る。

異世界の戦士、仮面ライダーティケイドだ。

士の変身が完了した。

ユウスケも既にクウガへと変身を終えている。

士が腰のライドブッカーを手に取り銃へ変形させる。
銃口を空飛ぶ黒タイツ怪人へ向け引き金を引く。

食らつた怪人たちが火花を散らし地面に激突。直後に爆散。

「俺も行くぞー。」

ユウスケも手ごろな銃を手に取ると体色が緑に変化。感覚を強化し銃撃に特化したペガサスフォームだ。

クウガも引き金を引く。

こちらはディケイドと違い速射能力は低い。

だが命中率と一撃の威力は高く、怪人を確実に一撃で仕留めていく。と、敵の黒タイツの一団の中に姿の違う、例えるならゴキブリのような姿をしている。

敵の親玉らしかった。

そいつが翼から何か液体のようなものを飛ばし、避け損ねたディケイドとクウガがまともに受け吹き飛ぶ。

液体を浴びると発火し、爆発するようだつた。

「くっ。あれが親玉か。」

士が呟く。液体を浴びた胸からは煙を吹いている。

士は新たなカードを取り出しバッклへ挿入。バッカルを閉じる。

「アタック、ライド ブラスト！」

すると士の手に持つ銃が分裂し、無数の弾丸がゴキブリ怪人めがけ飛んでいく。

しかしゴキブリ怪人はこれを難なくかわし一気に士との距離を詰めると着地と同時にショルダー タックル。

士は避け損ねまともにこれを受けた。

「ぐあっ！」

衝撃で「ロロ」「ロ」と転がり受け身を取り、何とか膝立ちになる。

しかし膝立ちになつたところへゴキブリ怪人の追撃の前蹴り。

士はたまらず後方へのけぞる。

追撃しようと怪人が歩を進める。

「士ッ！」

そこへユウスケが駆け付けペガサスフォームのまま怪人を羽交い絞めにする。

しかしゴキブリ怪人はこれを難なく振りほどくと逃がすまいと撃つ
ユウスケの銃撃も悠々かわし空中へ飛び上がる。

「くそ。ぶんぶん飛び回りやがって、ゴキブリはゴキブリらしく地面を這いまわってる。」

「ファインアル、フォーム、ライド ククククウガ！」

士が挿入したカードの音声が終わるや否やユウスケの変身したクウガに変化が現れる。

空中に浮いたと思ったら形を変え、その姿はクワガタムシを模したものになつた。

士がそれに飛び乗る。

「いくぞ、ユウスケ。」

ユウスケ扮するクワガタムシに乗つた士は先に飛び上がつたゴキブリ怪人めがけ飛翔する。

飛翔しながら士はライドブツカーをソードモードに変形。ゴキブリ怪人へと斬りかかる。

しかし怪人はこれを難なく回避。

避けられた士は態勢を崩しながら怪人の脇を通り過ぎる。そこへ怪人の液体攻撃。

士は受け切れず吹つ飛び、地面に墜落。

しかし、間一髪地面の所でユウスケがその背で受け止める。

「無事か、士。」

「ああ。なんとかな。」

そう言いながら立ち上がる士はまた体から煙を吹き、よろめいている。

そこへ怪人の追撃の突進。

しかしその攻撃がライダー達に当たることはなかつた。

怪人の攻撃が当たる寸前、脇を何かがかすめた。

それが怪人の脇へ命中し爆ぜる。

さらに士の脇を複数の光弾がかすめ、全て怪人へと命中。

怪人はたまらず落下する。

「なんだ？ 一体何が。」

驚いて振り返る士のもとへ近づく何か。

とつさに士は身構える。

「あれ？ オメエ誰だ？ こいつらと戦つてんのか？」

士のもとへ辿り着いた男が発した第一声がそれだった。

「オラてつきりクリリンか誰かが戦つてんのかと思ったんだがなあ。

まあいつか。」

男は何やら一人ブツブツ言つている。たまらず士が尋ねる。

「おい。お前は何者だ？ 何故生身で空を飛んでいる。それにさつきの

のは一体。」

「ああ、悪りい。オラア孫悟空つてんだ。空飛んでるのは舞空術つ

つってな。」

とそこで先程怪人の落ちたあたりから液体が飛んでくる。

「つと、危ねえな。とにかく話は後だ。先にあれをぶつ飛ばすぞ。」

悟空と名乗った男は怪人の液体攻撃を難なくかわしそう言つと怪人の元へ飛んでいく。

「ユウスケ。俺達も行くぞ！」

「あ、ああ。」

ユウスケと士も慌てて後を追う。

怪人は完全に防戦一方となっていた。

持ち前のスピードを更に上回るスピードで悟空が動くため、怪人はほとんど何もできずにただ殴られている。

「おい、これ、俺達の出番無いんじゃないのか？」

「うるさい、行くぞユウスケ！」

士が新たなカードを取り出しディケイドライバーに挿入する。

「ファイナル、アタック、ライド ディディディディケイド！」

音声の後ライドブッカーを剣状に変形させ構える。

士の眼前にはいつもの無数のカード群が現れている。

士とユウスケ扮するディケイドとクウガゴウラムはその中を信じられない速さで駆け抜けるとすれ違ひざま、

悟空が吹っ飛ばしたゴキブリ怪人の胴を横薙ぎに両断。

士達が怪人の脇を通り抜けるとほぼ同時にゴキブリ怪人を極太の気功波が襲う。

悟空のカメハメ波だ。

食らった怪人は跡形もなく消し飛んだ。

「なるほどな。大体わかつた。」

地上に降りた悟空は同じく地上に降り、変身解除した士達と改めての自己紹介と情報の交換を行つた。

それでわかつたことだが、本来この世界には怪人はいない。

10日前突如として怪人は現れ世界を破壊し始め、彼ら地球の戦士たちはそれを阻止するため、

皆散り散りになつて戦つているそうだ。

しかも、怪人の出現と同時に、集まつていたドラゴンボールが何処かへと飛び散つてしまい、

彼らは怪人の出現と何らかの関係があると考え、世界を守る傍らドラゴンボールの回収も行つているそうだ。

そして現在、悟空が2つ、ベジータとピッコロが1つずつの計4個が発見されている、とのことだ。

「じゃあ俺はこの世界でドラゴンボールつてのを7つ集めてこの世界の怪人を倒せばいいわけだ。

シンプルでわかりやすくていいな。

んで?まずは何をすりやいいんだ?」

「そうだな、まずは街を守つてもらいてえんだ。
人出が全然足りなくてな。」

「そうか。いいぜ。」

と、言うわけで士とユウスケはこの世界を守るために戦士の一人となるのだった。

「今回私全然出番ないです。」

と並んで、なつみの歴史は豊い経験を重ねながら、たしかに進んでゆく。

～小休止 怪盗の苦難～（前書き）

今回は海東の話となっています。

～小休止 怪盗の苦難～

さて、場所は変わってここにはブルマの家。今はこの家の主は外出していて留守だ。

その家に一人の男が忍び込んでいた。

「おかしいな、多分ここのはずなんだけれど。」

海東だ。

彼はドラゴンボールを探知できるドラゴンレーダーの存在を聞き、忍び込んだのだった。

「レーダーによるところの辺だね。」

ブルマの家で発見したドラゴンレーダーをもとに一番近くにあったドラゴンボールの反応をたどり、岩場の多い荒野に来ていた。歩くこと3時間。やつと目的の物を見つけた。岩でできた台型の上に乗ったドラゴンボール。

「見つけた。」

海東は小走りに近づく。そのときだった。

「何をしている。」

右手にある岩場の高台の上から声がする。

驚いて見上げるとそこには特徴的なM型の髪。ベジータだ。

「それは俺の物だ。一体何をするつもりだったんだ？そもそもお前は何者だ？」

「僕は世界を股にかけるトレジャーハンターさ。」

「トレジャーハンター？ 要するに泥棒か。」

「人聞きの悪い言い方はよしてくれよ。僕はトレジャーハンター。この世界のお宝を探している。」

海東はおなじみの指鉄砲のポーズをとる。描しているのはドラゴンボールだ。

ベジータは腕を組むと答える。

「そのお宝つてのが、ドラゴンボールつてわけか？」

「物わかりがいいと助かるよ。

「そう言うことだ。できれば黙つて僕にくれると嬉しいんだけどな。」

「フン。 そつはいくか。 断る！」

「そうかい、なら、力ずくしかないね。」

海東は言うと同時にいつの間にか右手に持ったディエンドライバーをクルリと一回転させ構える。

左手にはカード。それをドライバーに挿入する。

「カメン、ライド」

銃口を上に向け引き金を引く。

「ディッソエンド！」

音声と共に海東の体は特殊なスーツに包まれ上部から降ってきたフレートが頭にはまる。

それと同時に海東の纏つたスーツにシアンの色が浮かび上がる。

仮面ライダー・ディエンド。死（Die）と終わり（End）を司る戦士だ。

ベジータは腕を組んだまま見下ろすと言つた。

「それがお前の戦闘服か。なるほどな、戦闘力が極端に跳ね上がった。」

ベジータは組んだ腕を解き、空中に浮遊するとそのまま海東の前にゆっくりと降り、音もなく着地した。

「準備はいいかい？」

海東はそう言つと一気に間合いを詰め、銃で殴りつける。

ベジータは難なくかわすと裏拳で迎撃。

海東はそれをガードし今度は蹴りで攻撃。

ベジータはそれを受け止めると反撃。

二人の力は互角のようだった。

二人の拳が交錯しあい、蹴りが舞う。

と、ここで海東の放つた銃弾をベジータがバク転で避ける。

「一人の間に距離が生まれる。

「大口をたたくだけはあつて、やるな。」

「君もね。」

「だが俺の実力はまだこんなもんじゃない。」
ベジータはそう言つと全身に力を込め、氣を高めだした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！……」

次の瞬間ベジータの髪は金色になり、体の周りをバチバチと何かが言つている。

スーパーサイヤ人ベジータだ。

「なるほどね。じゃあ僕はこれだ。」

海東はカードを一枚取り出すとそれを順にドライバーに挿入。

「カメン、ライド　　キックホッパー！
パンチホッパー！」

引き金を引くと海東の目の前にそれぞれ緑と黒のライダーが現れる。

「見てよ兄貴。あそこに面白そうなのが居るよ。」

「お前はいいよな。キラキラ光つていて。その光、奪つてやるよ。」

「！」

二人は言つや否やベジータに襲いかかる。

まずはキックホッパーのキック。そしてパンチホッパーのパンチ。
ベジータはそれらを軽々とかわし、海東のもとへ一気に突っ込んだ。

「！」

不意を撃たれた海東は一瞬怯む。

その隙にパンチ、キックの嵐。フィニッシュとばかりに蹴り上げ。
食らった海東は空高く撃ちあげられる。

ベジータは更に追い打ちを掛けるべく飛び上がる。

「くつ！」

海東は空中で何とか態勢を立て直し上昇していくベジータ目がけ銃撃。

しかし海東の銃撃は空撃ちに終わつた。

ベジータは海東よりも更に高い位置にくるとそこからダブルスレッ

ジハンマー。

海東は何とかガードするが勢いは殺しきれず地面に高速で落下。

「がはっ！」

背中から地面に激突する。

「まだまだ！」

ベジータはそう言ひと両手をかざす。

その手から無数の気功波が海東めがけ撃ちだされる。

ドガドガドガツ！ドゴオオオオオオオン！！

大爆発。

キックホッパーとパンチホッパーも爆風に巻き込まれ消滅する。

「フン。」

ベジータは鼻を鳴らすとドラゴンボールを持ちその場を去った。
後には変身が解けてボロボロになつた海東の姿だけが残つた。

（2幕 悪夢再び）

「アタック、ライド ブラスト！」

ディケイドの持つた銃から無数の弾丸が打ち出される。

受けた黒タイツ達は地面に落ち、爆発。跡形もなく消える。

「超変身！」

クウガの超変身。パワーを高めたタイタンフォームだ。武器は剣である。

その剣を振り回し地上から攻め来る黒タイツ達をなぎ払っていく。

黒タイツ達はひとたまりもなく爆発と共に消滅する。

悟空に頼まれこの世界を守る戦士となつた彼らは一人でとある町の防衛にあたつっていた。

戦う二人のもとへクワガタを彷彿とさせる怪人の親玉が現れる。

「あれが親玉だな。」

言うと士はクワガタ怪人めがけ剣を構えて突進。

怪人は両手にクワガタの角のような刀を持つていてそれで士の剣撃を受け止める。

空いた方の手で土の胴を薙ぐ。火花が散った。

「ぐあつ。」

士は後方に大きくのけぞる。

なおも追撃してくるクワガタ怪人の攻撃を横転でかわすと手には新しいカード。

「そっちが虫なら、こっちも虫だ。」

「カメン、ライド クウガ！」

「虫言うな！」

今のはユウスケの悲鳴である。

ともかくクウガへとカメンライドした士は道端に落ちていた鉄パイプを左手に持つともう一枚カードを挿入。

「フォーム、ライド クウガ、ドラゴン！」

音声と共に赤かつたディケイドクウガの体色が青く変化していく。

スピードに重点を置いた、クウガ、ドラゴンフォームだ。

さつき持っていた鉄パイプはドラゴンロッドへと姿を変えた。

そこへクワガタ怪人が飛びかかる。士はそれをロッドで受け止め、相手の態勢を受け流して崩すとロッドで突きを繰り出す。

最初の2撃は怪人の胸にヒットしたが3撃目を空中に飛んでかわす

と怪人は戦法を変えたのか降りてこずに空中で刀を振り回す。

すると衝撃波が発生し、地面を切り刻む。士はこの斬撃に巻き込まれた。

「うわあ！」

吹っ飛んだ士。それをユウスケ扮するクワガタイタンフォームが受け止める。

「大丈夫か、士。」

「ああ。俺達も飛ぶぞ。」

「えつ？」

ユウスケの疑問と同時に士がカードをバックルに挿入。

「ファインアル、フォーム、ライド　　ククククウガ！」

「もういっちょ。」

「フォーム、ライド　　クウガ、タイタン！」

今度は士がクワガタイタンフォームに変身し、元々タイタンフォームだったユウスケは剣を取り落としクワガガウラムへと変形。落とした剣を士が拾いゴウラムに乗る。ややこしい話しだある。怪人の繰り出す衝撃波をかわしつつ上昇し、怪人と剣を交える。ガキン！ガキン！

火花が散る。

5撃目の攻撃の後士が跳躍。

怪人は上方の士に気を取られる。

ユウスケがその隙にゴウラムの角で怪人を挟む。

「！？」

怪人は驚き逃れよつともがく。

士の大上段からの転り下落

受けが懶人はひとがまゝもなく地面は落丁する

それに続いて士道も着地する。二ツスケは元の「マイティ・バー」に戻っている。

それをヒトノと行くが

גָּדוֹלָה

「ファイアーフラッシュ」

上野一帯の山野に生えます。

ユウヌアは挑戦へ、土は剣を構

「ハアツ！」

二人の卦ナ畜。

土のタイタンソードが怪人の胴を貫く。タイタンフォームの必殺技、

カラミティタイタンだ。

ユウスケは怪人の顔面に

の必殺、マイティキックだ。

一人の必殺技を受けた怪人は、それでもなお爆発しない。

後方へよろよろとよろめいていくと、こんなことを言つた。

「ザンキ様、バンザーイ！」

クワガタ怪人はそれだけ言つと後ろへと倒れそのまま爆散し、消滅

二
七

シテイナカニ

交換角附いた二方性語三に付いてある。同じく交換角附いた二

卷之三

ルカ福音書

一、又ヶか指せした方を見る

そこにはオレンジ色の球。中には3つの星が描かれている。

「これって、ドラゴンボールだよな。」

恐る恐る、といった感じでユウスケが近寄り、ドラゴンボールを手に取る。

「みたいだな。とにかく、持つて帰るぞ。」
そう言い士は踵を返し言つてしまつ。

「あ、おい、士！待てよ。」

慌ててユウスケも後を追つ。

これで見つけたドラゴンボールは5つ目だ。

「気円斬！」

円盤状のカッターに練り上げられた氣功波が敵を両断していく。
食らつた黒タイツ達は真つ二つになつた後、爆散する。

「はあ、はあ、後少し。」

ここは士達が戦つていた場所より少し南に行つたところにある農場地帯。

その上空で世界を守る戦士達の一人、クリリンが戦つていた。
時間的には士達が5つ目のドラゴンボールを発見する少し前、と言うことになる。

「これで、ラストオ！」

クリリンがトドメの氣功波を放つ。

最後の黒タイツが爆発する。

「よつしゃあ！」

クリリンは一人勝ち名乗りを上げる。

と、そこへ聞こえるはずのない、しかも、もしそうだとしたなら圧倒的な絶望を覚える声がした。

「よくもまあこれだけ、たくさん暴れてくれましたねえ。」

クリリンは戦慄した。震えが止まらない。

震えながらも何とか振り返るとそこには、

「お…お前…は…。」

「おや、誰かと思えばいつぞやの虫けら君ではないですか。
お久しぶりですねえ。」

「お…前…フリーーザ…なん…。」

「フフフ。そんなに恐がらなくてもいいじゃないです。
いいでしょ。私が何故この場に居るのか、特別に教えて差し上げ
ましょ。う。

確かに一度は死にました。しかし私は蘇ったのですよ。

ザンキ様のお陰でね。」

「ザンキ？一体…。」

「フフフ。あなたがそれを知る必要はありませんよ。
何故なら、あなたはこの場で死ぬんですからあ…！」

言つや否やフリーーザはクリリン田がけ一直線に突き進むとその胸に
拳を突き立てる。

「がはっ。」

胸を貫かれたクリリンが血を吐く。フリーーザは刺さった腕を抜くと
力なくダランとしたクリリンの体をゴミでも捨てるように地面に放
り捨てた。

倒れたクリリンの体から血が流れ、大きな血だまりができる。
しかしクリリンの意識は既に無かつた。

同じ頃。

ここはクリリンの居た場所から東へ少々といったある町。
そこに居るのはトランクスだ。

それともう一人。

「お前…は…。」

トランクスが言葉を失う。

「フツフツフ。久しぶりだな。トランクス。

私を覚えているかね。」

一七八

「これは光榮だ。覚えていてくれるとほん

何故貴様がここに
あの時死んだバスだ

確かに利はある時一度死んだらしがしかずたのた

「ザノニ」が「日本」に来た

「アーリーが一〇年以上教える一九四〇年から。私もデニッシュ様」

仕える身なのでな。」

やに並んで置くモニターバッハは姿勢を変える

卷之三

一瞬にして気を溜めたトランクス。その髪は金色に光り体の周りを

「やう。

アレキサン

「以前が教流ならニードルのうまい、カチャクで聴聞だ。(笑)

「できるかな？お前は既に一度私に負けているのだぞ？」

「あの時の俺と一緒にするな。行くぞ！」

モハシ・エリクスは一瞬にして體會しを語める。

しかし。

「なに？！」

トランクスの渾身の突きはセルによって難なく受け止められた。

「ファン、バカめ。貴様が強くなつたように、この私もまた強くなつ

卷之二

セルは言葉と共に空いた手でトランクスの腹に渾身のボディブロー

を叩き込む。

「が……がはつ！」

トランクスは空中で崩れ落ちる。

そこへ追撃の膝。

崩れ落ちていた顎めがけての物で効果は絶大だ。

トランクスの体は宙高く舞つた。

「トオドオメエだア！」

そう言いセルは気を溜める。そしてたまつた氣を両の掌から一気に放出する。

「カメハメ波！」

セルの放つたカメハメ波はトランクスに寸分違わず命中し、爆発。跡形もなく消滅した。

「フハハハ。ちょっとやりすぎたかな？」

セルは愉快そうに言ひとやつくりと去つて行つた。

～2重の悪夢～

「つーー？」

今度は悟空だ。悟空の守る街。

そこで戦いながら悟空は異変に気づいていた。

「クリリンとトランクスの気が、消えた…？」

彼はそれが事実なのか、一体何が起こったのかを確かめに行きたかつたが今は敵の大軍団との戦闘の真っ最中で行くに行けない。モヤモヤしたものを抱えながらも悟空は懸命に闘っていた。と、そこへ、覚えのある気が近づいてくる。

「まさか！」

驚いてそちらへと振り向くとそこには、

「お久しぶりですね。」

「お前は、フリーザッ！」

「私も居るぞ。」

今度はさつきまで悟空が向いていた方向から声。振り向く。

「セル！」

「ごきげんよう。お加減はいかがかな？

最も、これから最悪になるだろうがね。」

「なんでお前達がここに。」

「復活したんだよ。ザンキ様の手によつてな。」

今度は後ろでフリーザが答える。

「じゃ、じゃあまさか、クリリンとトランクスが消えたのは。」

「そんな名前だつたね、あの虫けら君は。」

「その通り。私がトランクスをやつた。」

「オメエらー許さねえ！」

そう言つと悟空は一瞬にして気を溜めるとスーパーサイヤ人へと変貌を遂げた。

「ぶつ倒してやる。」

それだけ言つと悟空はフリーーザのもとへ一瞬で距離を詰め蹴りかかる。トランクスよりも速い。

それをフリーーザは何とか防ぐ。悟空が追撃しようと手を振り上げたその時。

「私も忘れてもらつては困るな。」

後ろからセルの肘鉄。腰に刺さる。

「あぐッ。」

今度はフリーーザの前蹴り、そしてたたき落としの尻尾攻撃。悟空は吹っ飛び地面上に激突した。

その様子を樂しむかのようにゆっくりと降りてくる一人。

「フフフ、まだこんなものじゃないよ。ボクの復讐はね。」

「さあ、もつとの私を樂しませて見せや。」

悟空は絶体絶命のピンチに立たされた。

「おい、あれ！」

「わかつてゐる。急いでコウスケ。」

「ああ。」

士とコウスケはドリゴンボールを見つけ悟空の所へ戻つてきていた。

その途中で悟空がどうやら戦つているらしい所を目指した。

「変身！」

「カメン、ライド　ディケイド！」

「変身！」

士とコウスケはバイクに乗つたまま変身するとアクセルを吹かした。向かうは悟空の救援。

ドガツ、バキッ！

悟空はなす術もなくセルとフリーーザにボコボコにやられていた。

セルの回し蹴り。悟空が吹き飛ぶ。

「そろそろ、トドメにしようかな。」

大分氣も晴れだし。」

「そうだな。」

二人がそう言い悟空に近づいたその時。

「バーン！」

フリー・ザの胸で何かが爆ぜた。

「なんだ！？」

驚いて弾の飛んできた方に目をやる。そこには一台のバイク。士はセルに、コウスケはペガサスフォームのままフリー・ザに突っ込む。

「ぐつ。」

フリー・ザは予想外の展開にクウガにはねられた。地面を「口」「口」と転がりすぐさま立ち上がる。ダメージは少ないようだ。

「！？」

こちらは士。同じくセルを撥ねようとしたのだが、セルはこれを受け止めたのだ。

「ちつ。おとなしく轉かれる。」

士はそう言いライドブッカーを銃の形にするとセル目がけ銃撃。

「ぐつ。」

受けたセルは怯んで後退。

しかしすぐに立て直すと手から氣功波を打ち出す。

士は跳躍してこれを回避。

「よつ。無事か？」

悟空の横に着地した士は悟空に尋ねる。

悟空は苦笑しながら答える。

「当たりめえだ。これくらいのピンチ、しそつちゅうあるからな。」

そう言つ悟空は口と頭から血を流し、服も所々破けている。とても大丈夫そうには見えない。

「おめえ達にどつちか一人任せてもいいか？」

悟空の言葉に士が答える。

「ああ、どつちがいい？」

「じゃあフリー・ザをオレが倒す。」

「フリー・ザってどっちだ？」

「あの縁のライダーを痛めつけているほうだ。」

ユウスケはフリー・ザにボコボコにやられていた。

「ちょっ、士、早く、ぐはっ。」

「ああ、悪い。」

能天気に士が返す。

しかし手にはカード。

「アタック、ライド ブラスト！」

無数に分裂した銃身からこれまた無数の弾丸が撃ち出される。

それをフリー・ザは尻尾でガード。と、その尻尾をいつのまにか間合いを詰めていた悟空が掴んで振り回す。

「オラアアアアアアアー！！」

フリー・ザは投げ飛ばされる。

士はすかさずユウスケに声を掛け、セルに向かつて走り出す。

「ユウスケ、行くぞ！」

「ちょ、待てよ士。」

言いながらユウスケは落ちていた棒を拾い上げ超変身。先程ディケイドクウガもなつた、ドラゴンフォームだ。

士の先制右パンチ。セルは首を傾けてかわす。

そこへユウスケのロツドによる突き。

それをセルは右手で軽々掴み止め、そのまま振り回す。

「うわあ！」

ユウスケは士を巻き込み吹っ飛ぶ。

「痛つて、ユウスケ、俺を巻き込むなよ。」

そう言い起き上がった士の目の前にセルがいた。

「話している暇はないぞ。」

顔面目がけ蹴りが飛んでくるのを士は何とかブロックし、後方へ飛び退く。

すかさずユウスケのなぎ払い攻撃。

セルはこれをしゃがんでかわすと起き上がりざまに気功波を打ち出してくる。

ユウスケは避けきれずにくらい吹つ飛び。

士は銃に変形したライドブッカーを撃つ。

しかしセルはこれを軽々避けるとニヤリと笑いながら囁く。

「遅い遅い。そんなことでは当たらんぞ。」

士はそれを見て言った。

「なるほど、大したスピードだ。

だが、スピードならこっちも負けて無いぜ。」

新たなカードを取り出す。

「変身！」

「カメン、ライド」

声と共にバッカルを閉じる。

「ファイズ！」

士の体に赤い線が刻まれる。

次の瞬間その姿は仮面ライダー・ファイズへと変身を遂げる。すかさずもう一枚のカードを挿入。

「フォーム、ライド ファイズ、アクセル！」

ファイズの胸のアーマーが開き色も変化する。

それを見たセルが感嘆の声を上げる。

「ほお、面白いな。」

「もつと、面白くしてやるぜ。」

士はそう言い腕のスタートースイッチを押す。

「start up」

音声と共に士の姿は消えた。

次の瞬間セルの体が大きくなるけれども。

それも何度も。

セルは食らいながらも気を溜めるとなんとかバリアーを張った。

そのバリアーをまともに受けた士が火花を散らせながら現れる。

「ぐああ！」

「3・2・1 time out」

転がり終えると士のアクセルフォームの変身が解ける。

「はあ、はあ、やつてくれる。」

セルは肩で息をしている。相当なダメージだったようだ。

ドガガガガ、バキッ、バキッ、ガツ、シユツ！

先程からずっと戦い続けているのは悟空とフリーザ。

二人の力はほぼ互角で消耗戦の様相を呈していた。

「はあ、はあ、やるね。」

「おめえもな。」

そう言うとまた二人の姿が消える。

あちこちで岩や建物がガラガラと音を立て崩れる。

しかし思つたほど長期戦にはならなかつた。

悟空が更に気を溜め始める。

「はああああ！」

先ほどよりも更に大きなオーラを纏つたスーパーサイヤ人2の孫悟空だ。

「な、何！？」

驚いたフリーザは一瞬怯む。

その隙を逃さず悟空は間合いを詰めフリーザの懐に入るとしたから

フリーザの顎頭がけひじ打ち。

フリーザを上空高く撃ちあげる。

「トドメだ！カメハメ波ー！」

悟空の手から打ち出されたカメハメ波は見事にフリーザに命中し大爆発を起こす。

フリーザが大爆発する所を見た士は、

「さてと、こつちもそろそろ決めるか。」

と言いカードを取り出す。姿は元のディケイドに戻つている。

「ファイナル、アタック、ライド」

「させるか！」

セルはそう言い土田がけ突つ込もうとする、が、
バキュン！

突如として撃たれ動きが止まる。
見るとそこにはいつの間に超変身したのかペガサスフォームとなっ
たクウガがいた。

「土！」

「ああ。」

士がバツカルを閉じる。

「ディディディディケイド！」

士の眼前に無数のカード群が現れる。

士は跳躍。そのカードの中へ身を躍らせる。

銃撃を受け怯んでいたセルはかわせずまともに食らいつ。

そして爆発。

着地した士の下にコウスケと悟空がやつてくる。

「やつたな士。」

「おめえ、本当に強えな。あのセルを倒しちまうなんて。」
等と言つていると。

「私の誇る戦士達を倒すとは、やつてくれるな。」

よく通る、ドスの利いた声。それが後方から聞こえる。

3人はすぐに振り返る。

そこに居たのは、黒タイツ、しかしその体は鎧に包まれ背にはマン
トまである。

「お前がザンキか。」

士の問いにザンキが答える。

「いかにも。よくもやつてくれたな。

だがまあいい。また作ればいいだけの話だからな。」

「何の話だ。」

ザンキはそれには取り合わず自分の話を始める。

「孫悟空、貴様のドラゴンボールを持って来い。」

「おめえ、何言つてんだ？」

「私の言つことがわからんのか、ドラゴンボールを持つてこい。

そうすればこの世界を破壊し、新たに創造する。そして私がこの世界の神となるのだ。

おとなしく持つてくれれば貴様らを神の直属のしもべとしてやるさ。

「いちいち勘に触るやつだな。俺は誰にも仕える気はない。」

士はそう言い劍を構え走つていく。

しかし士の一撃は簡単にザンキの手で止められカウンターを食らう。食らったのは一撃だがそこから派生したかのように火花が士の全身を襲う。

「うああああ！」

「士！」

吹つ飛んだ士は変身が解け、氣を失つた。

それを見たザンキはおもむろに手をかざすと地面から何やら盛り上がりが現れる。

それが形を成していく。その姿は。

「そんな。」

「あれは。」

ユウスケと悟空がそれぞれ驚きの声を上げる。

その姿は先程彼らによつて倒されたセルとフリーザのものだつた。

「全く貴様らは、次は無いと思え。」

「はつ、申し訳ありません。」

セルとフリーザはひざまづくと謝罪を口にする。

「まあいい。帰るぞ。」

「はつ。」

ザンキは言つと踵を返す、しかし念を押すためかもう一度言つた。

「ドラゴンボールを持つてこい。いいな。

それが正しい選択だ。」

それだけ言つとザンキはセルとフリーザを伴つて北の方へと飛び去つて行つた。

～小休止2 怪盗の喜び～（前書き）

なんか今回2とか多いです。
許してやつてください

～小休止2 怪盗の喜び～

「や、りれつぱなしじゃ終われないからね。」
海東はベジータに負けて意識が戻つてから別のドラゴンボールを求めてさまよっていた。

先程の戦闘のせいでドラゴンレーダーは壊れてしまつたので今は当てもなく彷徨つているだけだ。

しかし当てもなく彷徨つておひつじの時間が経つたころ。

「僕は運がいい。

やつぱりお宝に好かれているみたいだね。」

「なんだお前は。」

「君こそなんだい？ 緑色の怪人なのになんで怪人と戦つているんだい？」

「フン、よく言われるよ。俺はピッコロ。これでもこの世界を守つているんだ。」

「そうかい。まあそんなことまだうでもいい。」

海東はそこで一度言葉を切りピッコロの背後の脚の上に置いてあるドラゴンボールを指さすと言つた。

「僕はそこのお宝に興味があつてね。できれば黙つて差し出してくれるとありがたいんだけど。」

指鉄砲のポーズでドラゴンボールを指す。

「悪いな、断る。」

「なら仕方ない。」

海東はディエンドライバーを取り出す。

「カメン、ライド ディッシュエンドー！」

変身した海東を見てピッコロが言つ。

「ほお、お前も仮面ライダーとか言つやつか。だが悟空が言つてたのとは違うみたいだな。」

「まあね、僕は士とは違つ。」

海東はここで新たなカードを挿入。

「縁には、縁だ。」

「カメン、ライド ギルス！」

引き金を引くと海東の眼前に仮面ライダー・ギルスが出現。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ギルスは雄叫びを上げるとピッコロめがけ突進。

ピッコロはかるうじて回避。すかさずカウンター。

しかしギルスは怯まずになおも追撃してくる。

ピッコロはそれをかわしつつカウンターを叩き込む。

と、ここでもさきまでいた場所に海東が居ないことに気がつく。

「まさか。」

驚いて振り返ると案の定そこにはドリゴンボールを抱えた海東が居た。

「悪いけどこれは頂いて行くよ。」

「待て！まだ決着はついてないぞ！」

海東は新たなカードを取り出す。

「僕にとって優先すべきはお宝の回収でね、君との決着なんてどうでもいいのさ。じゃあね。」

「アタック、ライド インビジブル！」

海東の姿が消えていく。

「さて！卑怯だぞ。」

「よく言われるよ、でもこれが僕のやり方でね、君はギルスとでも遊んでなよ。」

ギルスがピッコロに襲いかかる。

ピッコロはかわしざまに氣功波を打ち出す。ギルスは消滅した。

それを確認もせず空中に浮かびあがると辺りを見渡す。

「くっ。」

しかし辺りに人影は無かった。

「」

～終幕 神との戦い～（前書き）

中一病でスマイマセン

～終幕 神との戦い～

「…かれ…十一…」

「ん、うつ…。」

「あ、よかつた。目を覚ましたんですね、士君。」

「なつみかん…それにコウスケ…」
「こには？」

士は起き上がると一人に尋ねた。

「こには写真館ですよ。」

「倒れたお前を悟空が運んでくれたんだ。」

「悟空は、あいつはどうしてる。」

「今は居ない。なんでも仙豆つて言ひのを取りに行つてゐるらしいんだ。」

「仙豆つていうのは食べればどんな傷も治つてしまつて、こいつ不思議な食べ物らしいですよ。」

なつみがコウスケの説明を補足する。

それからコウスケが士が倒れた後の事を説明する。

「なるほどな、大体わかった。なつみとビザンキを倒しに行くぞ。」

「そう言つて士はよろよろしながら立ち上がると外に出まつとする。」

「あ、まだ駄目ですよ士君。悟空さんが戻つてくるまで休んでないと。」

「それなら心配ない。もう帰つてきてるぞ。」

士の声と同時にドアが開き悟空が入つてくる。

「士、おめえもついいのか？」

「お前が士か。」

悟空の後に続いてベジータが入つてくる。

「誰だ？お前。」

士が尋ねる。

「俺はベジータ。自己紹介している暇はない、やつせと仙豆を食え。」

行くぞ。」

そう言い仙豆を突き出すベジータ。士はそれを受け取ると口の中に入れる。

するとみるみる傷が回復し、疲労まで取れた。

「へえ、こりやすげえ。」

手を握つたり開いたりして自分の体の具合を確かめる。

「おし、治つたみてえだな。じゃあ、行くか。」

「ああ。」

それから士とユウスケはバイクにまたがり、ベジータと悟空は空を飛んでザンキのアジトへと向かった。

「おい、あれじゃないか？」

ユウスケが言つ。

ザンキのアジトは一目見ただけでそれとわかるほどの大な要塞だった。

むしろ何故今まで気がつかなかつたのかおかしいくらいだ。

「要塞だな。」

「お~、スゲ工数の怪人だ。」

ベジータと悟空がそれぞれ言つ。

彼らにはもう要塞の中まで見えていたようだ。

要塞につくと怪人たちは手を出すなと言われているのか恨めしそうにこつちを見るだけで何もしてこない。

そのまま4人は大広間へと入つていく。中心には玉座がありザンキがそこに居る。

ザンキは椅子にふんぞり返つたまま言つた。

「フハハハ、来たか。ドラゴンボールは持ってきたかね。」

悟空が前に出て答える。

「残念だが持つてきてねえ。」

それを聞いたザンキは傍目から見てもそれとわかるほどあからさまに不機嫌になつて言った。

「ならば一体何をしに来た。」

今度は士が喋る。

「お前らを倒しにだ。」

それをきいたザンキは笑いだす。一通り笑つた後でこう切り出す。

「倒す？ この私を？」

私はこの世界の神となる存在だぞ？ それを倒すだと…？
冒流もいいとこだ。」

ザンキの言葉を遮るようにベジータが割つて入る。
「神だと？ 何が神だ。お前はただの人殺しだ！」

それを聞くとザンキは立ち上がり言つた。

「人殺し？ バカな奴らだ。どの道生き返らせるのだ。
何人殺そうが問題無からう。」

ザンキの言葉に今度は士が答える。

「バカはお前だ。一度世界を滅ぼし新たに創造する？
世界はお前のおもちゃじゃない。」

世界は、こいつ等は、今も懸命に生きているんだ。
それを邪魔する権利はお前達には無い！」

「貴様、一体何者だ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ。

覚えておけ。」

「よからうづ。貴様らは神に反逆したのだ。反逆者には死あるのみ。
皆の者出あえ！ 反逆者どもを皆殺しにしろ！」

ザンキの声に応えるようにさつきまで見ていただけの怪人たちがその眼に明らかな殺氣を宿らせ大広間へと殺到する。

「行くぞ、皆！」

፩፻፲፭

士の声に3人が答える。

「變身！」

「カメン、ライド
デイケイド！」

其とエウスケがそれそれを假面ライダリーに

ザンキの左右にはいつの間にかセルとフリー・ザが居る。

たああああ！」

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ୍ ଅଧୀକାରୀ

寄つてくる怪人をユウスケが殴り飛ばし、蹴り転がし、殴られ、蹴られ、投げ飛ばし、斬られ、殴り返ししている。

浮き上がる。

「あなたは私に一度成す術もなく負けているのですよ？」
「それがどうした。あの時の俺と一緒にするな！」

ベジー タはそう言い一気に突進

ベジ フード 製造工場の車いす用斜面

反擊、

ヘシ一夕はそれをかわすと今後に躊躇して攻撃
とんとん緑く

「行くぞ、セル！」

一
來
い
！
』

悟空とセルの戦いも始まつた。こちらもほぼ互角。

一方こちらは土 V.S ザンキ。

勝負は圧倒的だつた。

士の攻撃を易々と受け止めカウンターを叩き込み、蹴り飛ばす。
士は防戦一方となつた。

「超変身！」

ユウスケはタイタンフォームに変身。襲い来る怪人たちを薙ぎ払い、
斬り、突く。

食らつた怪人の一部は耐えきれずに爆散。
しかし何分数が多い。

遠距離から蜘蛛型怪人の糸による攻撃。

ユウスケは捕われる。

すかさず他の怪人たちが殴り、蹴り、斬つてくる。
衝撃で糸が切れユウスケは吹っ飛ぶ。

「くつ。」

ユウスケはすぐさま起き上がると剣を構え直しました怪人の群れの中へと斬り込んでいく。

「はあ、はあ。どうした。大口を叩く割に大したことないぞ。」

「あまり調子に乗るんじゃないよ。」

フリーザは言うとベジータ目がけ突撃。

ベジータはそれをかわし蹴り上げ。上空高く撃ちあげた所を氣功波で追撃。

フリーザは態勢を立て直し、それを手で弾く。

両手を使いガードががら空きになつたボディにベジータ渾身の蹴りが決まる。

「ゲフッ。」

怯んだ隙にアッパー、顎が上がつたところにストレート。

「くたばれえ！」

ベジータのラッショ。フリーザはもはや成す術なく殴られている。
ラストのかかと落とし。

「ファイナル、カメン、ライド ディケイド！」

士はバツカルを外しケータッチをはめる。

その姿は全てをコンプリートした最強の存在、コンプリートフォームへと変貌する。

「行くぜ。」

剣をいつもの動作で構えるとザンキに突進。さつきよりも速い。ザンキは慌ててパンチを繰り出しが、すれ違いざま斬撃を浴びる。振りかえりざまにもう一閃。返す刀でさらに追撃。火花が散り、ザンキは吹っ飛ぶ。

それを見た士はケータッチのボタンを押す。

「アギト！ カメン、ライド、シャイニング」

音声の後士のすぐ横に仮面ライダーアギト シャイニングフォームが現れる。

そしてカードを挿入。

「ファイナル、アタック、ライド アアアアアギト！」

士が剣を構えるとその動きに追随するようにアギトも動く。手にはシャイニングカリバー。

「はあ！」

士とアギトが剣を振るとそこから衝撃波が生まれザンキめがけて飛んでいく。

その衝撃波は見事ザンキを切り裂いた。

「わ、わた…しは…神に…。」

ザンキはそれだけ言うと膝から崩れ落ち爆発。

衝撃で要塞が崩れ始める。

「おい！悟空、ベジータ、ユウスケ、脱出するぞ。」

「「「おうーーー」」

三人に声を掛け一気に要塞の中を駆け抜ける。すぐ後ろでは天井が崩れ落ちている。

士達4人は駆けた。

～終幕 神との戦い～（後書き）

どうだったでしょうか。

後半は仮面ライダーらしくあつさつさせてみました。

その後の展開は予想通りだと思います。

スマセン

～Hペローグ 怪盗の苦難2 次の世界へ～（前書き）

いやホント、ネーミングセンスなくてスマイマセン

～ヒローグ 怪盗の苦難2 次の世界へ～

「無事脱出だ。次は何をするんだ?」

脱出した士が最初に言つたのはこれだった。

背後では崩れた要塞の残骸から煙が立ち上つてゐる。

「ドラゴンボールを集める。笛を生き返らせてやらなくちゃならねえからな。」

その問いに悟空が答える。

4人は手分けして残つたドラゴンボールを探しに出発した。

一方こちちはドラゴンボールの一つを手に入れ意氣揚々と歩いてゐる海東。

「これがドラゴンボールか、きれいだな。」

などと言つてると、その手からボールが消える。

「海東、これはもうつっていく。」

「なつ、待ちたまえ士。それは僕が苦労して手に入れたドラゴン。

「つむぎーー所詮盗んだものだらうが。とにかくもうつていいくぞーー。」

海東の言葉を遮り士はそれだけ言つと走り去る。

「待ちたまえ! 士、それは僕の。」

海東はなおも追いすがる。その時上空から声がした。

「やつと見つけたぜ。泥棒野郎。せっせと返してもうおうか。」

ピッコロだ。どうやらずつと探していたらしい。

「全く、しつこいね、君も。」

「ちょうどよかつたじやないか、キツイお仕置きをしてもらひうんだな。」

士はそう言つて去つてしまつ。

「なつ、待ちたまえ士!」

「待つのはテメエだ泥棒野郎。」

海東がその後またもやボロボロにされたのは言つまでもない。

その後の話を少ししておぐと、と言つてももう大体想像通りなんだが。

とにかく集めたドラゴンボールで今までに怪人に殺された人々を蘇らせた。

もちろんクリリンやトランクスもだ。

それでめでたしハッピーエンドと言うわけだ。

そんなわけで俺達は悟空達と別れ新たな世界に来ているわけだが……。

「なんだこりゃあ。」

スクリーンに映し出されたのは……。

この話はまた今度しよう。とにかく俺達の冒険はまだまだ続きそうだ。

～ヒュローグ 怪盗の苦難2 次の世界へ～（後書き）

はい。というわけで予想通りの展開でした。
感想くれるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0561m/>

仮面ライダーディケイド～ドラゴンボールの世界～

2010年10月11日05時02分発行